

Problem Solving

Case 6



子どもへの学習支援と一緒に作って食べる子ども食堂

アソシエーション **てらこや**
こどもごはん

緑区

課題1 | 活動目標の決定・役割の設定と運営

課題2 | 活動内容・役割方法

課題3 | **団体運営**
場の確保・資金の確保・広報周知

課題4 | 子どもとの関わり

子どもへの学習支援と一緒に作って食べる子ども食堂

アソシエーション **てらこや** こどもごはん



小学校での学習ボランティアの経験から、教室の中では学習についていけず置いて行かれる子どもがいることに気づき、少しでも子どもたちの力になればと思い、同級生の母親2人で学習支援をはじめました。活動していく中で、子どもたちの生活面、特に食生活について気になり、子どもが自分で食事を作る力も育てようと「こどもごはん」も開始しました。

この方にお聞きしました

PROFILE

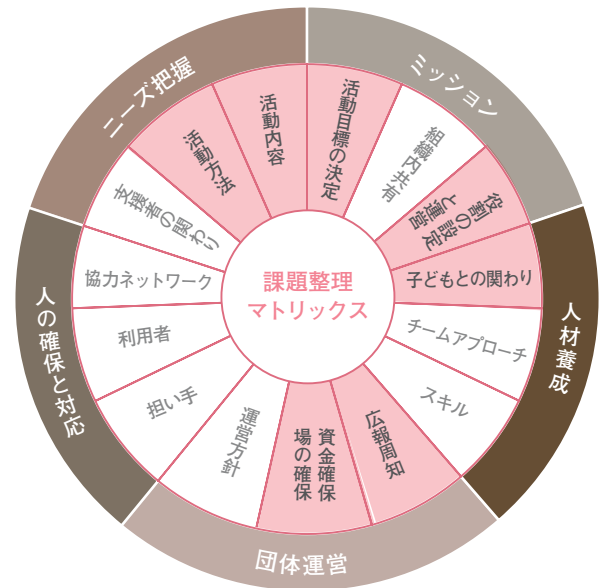
高橋 康子さん (57歳)

ワーカーズコレクティブ「ひまわり」代表。活動のきっかけは、児童養護施設の家庭教師ボランティアに参加したこと。子どもがその時代の社会で生きて行けるよう育てることは、親の役割であり社会の役割だと思っている。生きる力をつけてもらいたいと思うから「てらこや」に来る子どもたちにも、厳しく言うようにしている。



酒井 朋子さん (52歳)

教師を志望し、中学・高校の数学非常勤講師を務める。数学を教える一方で、生徒一人ひとりの困りごとが気になり、支援活動に興味を持つ。結婚・出産を機に退職し育児サークル運営・自治会・子供会に関わり地域で子供を育てることの大ささを実感する。小学校で読み聞かせボランティアを立ち上げ、学習ボランティアにも参加。高橋さんとの出会いから土曜塾を始めることに。現在、発達障害・インクルーシブ教育・支援員の勉強をしながら、自宅でも「てらこや」を開いている。



活動のきっかけ

高橋さんと酒井さんは、それぞれの第1子が同級生で、15年来のママ友達。子どもたちが通学していた三保小学校で、地域に向けて学習支援ボランティアの募集をしており、それに高橋さんが応募。最初の年は先生が事務局でしたが、翌年は、ボランティアが事務局を担うことになり、高橋さんが事務局となり、地域コーディネーターI期生として活動を始め、後に酒井さんも一緒に活動することになりました。

当時(2008年)、三保小学校はPSY(パイオニアスクール横浜)に指定され、学習ボランティアが授業のサポートに入ることで地域の力を活かした教育を目指しており、素晴らしいことと思って参加しました。実際に学校で授業に入ると、35人のクラスの生徒たちの中で、学習が理解できないままに取り残されていく子どもがいて、このような子どもをサポートするために、学習支援ボランティアの活動に意義があると実感しました。

しかし、先生と学習支援ボランティアがサポートに入り授業を進めることは容易なことではありません。残念なことに、学習ボランティアが活用されたのは、たくさんある授業のなかで一部。すべての先生にボランティアを活用してもらうには至りませんでした。それでも、九九の聞き取り、ミシンのサポートなど、ちょっとした学習のサポートを行ってきました。

発足から5年で、学習ボランティアの活動は、家庭科(調理・

〈てらこや〉	
開催場所	ハーモニーみどり（緑区福祉保健活動拠点）
開設年月日	2014年4月
担い手	2名
参加費	6か月1000円
活動内容	<input type="checkbox"/> 算数、数学の学習支援（小学3年～中学3年） 利用条件：塾や家庭教師を利用していないこと 毎週木曜日 ① 17:30～（小学生）10名 ② 19:00～（中学生）4～5名

〈こどもごはん〉	
開催場所	生活リハビリクラブ鴨居
開設年月日	2015年
担い手	4名
参加費	子ども100円 おとな300円
活動内容	<input type="checkbox"/> 子どもと一緒に昼食づくり 毎月第2日曜日 11:00～13:00

ミシンなどのサポート）・安全サポート（火や刃物を使うときのサポート）・課外授業（引率のお手伝い）、他にも必要な時にということになり国語や算数といった教科学習のサポートは辞めることになりました。

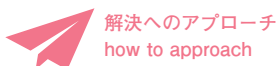
一方、学校で補習塾「土曜塾」を月2回第2、第4土曜日に開くことになり、学習支援ボランティアの活動の場が、追加される形になりました。しかし、土曜登校が増え、土曜塾が月1回に減り、それをきっかけに、「自分たちで学習支援をしよう」と考え、学校にPRなどに協力して頂き、2014年「てらこや」を始めました。

最初は、生活クラブ生協の会議室を無料で借りて行っていたのですが、会議室が閉鎖されることで、ハーモニーみどり（緑区福祉保健活動拠点）を借りて活動しています。学習支援を始めてからは年末年始以外、毎週木曜日の夕方、活動を続けています。

課題1

活動目標の決定 役割の設定と運営

I 比べられて育つ子どもの育ちへの影響



子どもたちがのびのびと学び成長できる場づくりを

本来、学ぶということは、それぞれの子どもが学びたいと思うことを学ぶことであり、全ての子どもに同じことを出来るようにすることではないと考えています。勿論、学びに興味関心を待つよう、学ぶ事は楽しいことなんだと実感できるよう働きかけも大切ですが、「できるようになる」ではなく、子ども達が一生懸命考えどう取り組んだかが重要だと思っています。

「てらこや」は少人数異学年が一つの部屋で「ごちゃまぜ」に勉強しています。そこには、せっかちな子もいれば、時間をかけてじっくり取り組みたい子もいます。授業についていくのが難しい子、逆に学校で教えてもらうことだけでは物足りない子がいったり、お母さんや兄弟と一緒に来ることが出来る子もいます。学年を分けることなく、いろいろな子がいるということは、まわりと比べることがなくなり、ありのままの自分で学ぶことができています。比べる、評価するは本来の学びの妨げになると改めて感じています。

「てらこや」では、小学校の算数、中学校の数学の復習・補習

をしますが、必要に応じて数理パズルや思考する楽しさを味わえるような問題を出しています。開始当初は算数の学習につまづき、自己肯定感が下がってしまう子どもたちの力に少しでもなればとの思いで始めました。活動を通じて全ての子どもたちに、自由にありのまま学べる場、その子の持っているものを評価するのではなく、そのまま価値があると受け入れてもらえる場所が必要だと感じ活動しています。

保護者（親）とのかかわりを大切に

てらこやでは、子どもとの関係だけでなく、親との関わりも大切にしています。

てらこやには、様々な学びの場の情報をキャッチして、自分のこどもに合った学習をさせたいという意識の高い家庭の子どももいます。一般の塾には行きたくないけど、てらこやなら楽しく通える子、体力、気力が不安で自分のペースで学びたい子、同学年では他の子と比べられて嫌だけど異学年だとのびのび学べるという子など、様々なタイプの子どもがいます。

入会の際には、保護者と面談をして、「てらこや」は塾とは違う学びの場であることを理解してもらうようにしています。また保護者には、入会後も気になったことを共有するばかりではなく、ポジティブエピソード・・・子どもたちが一所懸命取り組んでいること、がんばったこと、楽しかったこと、てらこやに来て変化した様子なども、電話やSNSで伝えています。

II 学力だけでなく身につけて欲しいこと



社会で生きる力を養う

社会情勢が変化し続けている中、生きにくい社会と感じている大人が多いと思います。人間関係が希薄になると、地域社会とのつながりを広げ、深め、豊かに生きることイメージも持てないかもしれません。

「てらこや」では学習だけではなく、子どもが社会でたくましく生きていけるよう、どうしたら自分の良さや努力を認めてもらえるかの「術」を伝えています。提出期限を守ることや先生が認めてくれることもある。点数につながってなくても、その子なりに努力したことが伝われば理解してもらえます。社会で生きるための力をつけて欲しいと思っています。

想いを打ち明け、気持ちの整理をすること

子どもと雑談をしていると、素の顔が見え隠れします。大切な話にも何気ない話にも耳を傾け、聴くようにしています。自分の話を誰かにゆっくり聴いてもらえる環境は全ての子どもの必要です。子どもたちの中には、親には心配かけたくないとか、理解されにくかった時など面倒なことにもなりかねないし、怒られることだってある…等で、心のうちを明かさない、明かせないこともあるようです。学校の先生には、成績に影響するかもしれないし、レッテルをはられる気がする等で、やはり、なんでも話せる対象にはなりにくいとも感じている子もいます。

人が何かに葛藤したとき、誰かと共有したいと思うことがあります。伝える側が、自分のことを話しながら、起こっていることを整理し、話している相手に意見を求めることもあります。自問自答しながら、解決策を見出すのです。てらこやは子どもたちにとっては先生でもない、親でもない、利害関係のない斜めの関係でありたいと思っています。

課題2 | 活動内容・役割方法

I 子どもたちのニーズに対応する「子ども食堂」



解決へのアプローチ
how to approach

いわゆる「子ども食堂」は子どもに食事を用意してあげている場所だと思います。しかしそれよりも、子どもたちが自分で食事を作ることができるよう、家にある野菜を食べられるようになって欲しいと思い、作って食べる「こどもごはん」を始めました。

II 生活力を身に着ける支援と方法



解決へのアプローチ
how to approach

食の提供から食事作りのチカラを身に着ける場に

具 体 策

最近「子ども食堂」の取り組みが広がり、無料で子どもたちに食事を提供しているところが多くなりました。「こどもごはん」の活動ができるのは月1回、1食100円で、子どもと一緒にお昼ご飯を作ります。食生活によって健康を維持していくことは、とても大切です。

子ども達自身が食事作りをできるようになれることが、生きる力を身に着けることになり、それを教えることができたらと思いました。会場は生活クラブのデイサービスを使わせて頂いています。

子どもでも自分で作れるよう、包丁とガスコンロは使いません。まず、野菜を洗うところから始めます。野菜を手でちぎったり、はさみを使ったりして、電子レンジ・ホットプレート・オーブントースターで調理します。味付けも、ポン酢やごまだれなど市販の製品を活用します。そうすることで家にある野菜を自分たちで調理し、食べられるようになります。また、みんなで作ってみんなで食べることで、食の楽しさを知ること大事なことと思っています。食後は自分が使った食器は自分で洗います。

課題3

団体運営

場の確保・資金の確保・広報周知

I 場の確保 どこで活動するか



解決へのアプローチ
how to approach

公的機関の協力で無料で定期的に利用できる場の確保

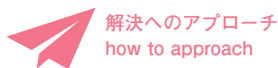
「てらこや」は、緑区福祉保健活動拠点「ハーモニーみどり」の夜間の時間を毎週、定期的に使わせてもらっています。無料で借りられていることは何より助かります。活動の継続に場所が



あるということはとても大事です。ロッカーもあり、教材も保管できます。

「こどもごはん」は、生活リハビリクラブ鴨居運営会議とワークーズコレクティブひまわりの共催という形で、生活リハビリクラブのデイサービスが休みの日曜日に会場を使わせてもらっています。調理器具も揃っていて、とても助かります。

Ⅱ 資金確保 活動費をどうするか



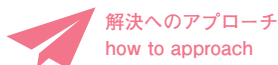
活動費は助成金と参加費で賄う

「こどもごはん」を始めた頃、緑区の地域課題チャレンジ提案事業に選ばれ、3年間は助成金を受けることができました。そのことから「こどもごはん」のチラシを作成し学校に配布することができるようになりました。区役所の生活支援課とのつながりもできました。

「てらこや」は助成金で教材を揃えています。ほかに必要なものは、半年1000円の参加費で賄うことができます。

一方、「こどもごはん」はお米と野菜の寄付のおかげで、子ども100円、大人300円の参加費で賄うことができます。

Ⅲ 広報周知 活動を知ってもらうには



公的機関の広報誌等の活用による周知

緑区社会福祉協議会で区内の学習支援を紹介する広報に載ったことで、問い合わせがあり、参加するようになった子どももいます。あとは口コミで広がっています。現在参加者は、「てらこや」で小学生10名、中学生4、5名程度です。少人数異学年が実現できる調度良い人数です。

「こどもごはん」は参加人数が安定していません。誰も申し込

まない日もあれば、10数人参加する日もあります。

団体運営は、無理せず続けること

学習支援は高橋さんと酒井さんの他に、学習支援では、学生ボランティアが1名、こどもごはんは高橋さんと生活クラブの仲間の4人で運営していますが、特に困ったことはありません。勉強にとどまらず、子どもたちを応援したいという想いを共有できる方と一緒にやって行きたいと考えています。今まで活動してきた小学生が一人だけという年もありました。大切なのは人数ではなく目の前の1人を大切にすること、子どもたちへの思いを持ち続け、無理なく長く続けることだと思っています。

課題4 | 子どもとの関わり

I 見守る、寄り添う大人の存在



評価されない、子どもが安心できる時間を

現代社会は、可視化できるもの、点数化できるもの、生産性のあるものばかりに価値を見出そうとします。学校も社会も与えられたことをこなせる子、教えられたことを再現できる子が優れていると勘違いしています。

「てらこや」や「こどもごはん」の活動を通して感じることは、テストの点数や学習の評価など、可視化できるものばかりが成長ではないということです。子どもたち自身が、居場所で仲間や支援者と共にやるべきことに気づき、それができるようになった時、子どもたちは喜びを感じ、自信を持ち、仲間と共にいることに幸せを感じます。私たちがそんな場に会ったときには、子どもたちを、精一杯褒めて、自信を持ってもらいたい、自己肯定感を育みたいと心から思っています。



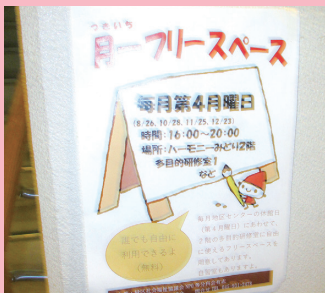
II もっと多くの子どもの居場所が増えていくように



他の居場所づくりへの協力

自分たちの活動を大きくすることよりも、私たちの活動に興味をもって来て、他の場所で、自分の地域で活動を始めたいという方が増えていくことが大切だと思います。社協のボランティア講座などでの報告や見学を頼まれた時は、それをきっかけに新たに始めてくれる人がいればと思います。

多くの居場所があることが大切だと思います。また、居場所を作りたいと思っている方もたくさんいます。酒井さんは障害者と健常者を分けることなく共に過ごすことがすべての人が幸せになり豊かな社会になると、共生社会の啓発活動もしています。高橋さんはハーモニーみどりの休館日に子どもたちの月1回の居場所づくりのために、NPO等分科会に声をかけ、有志を募るなど、それぞれ異なる活動支援も行っています。



取材を終えて

担い手の2人は、小学校の学習ボランティア当時から仲間、学習支援の目的を学力の向上という点だけでなく、社会で生きていく力をつけることに主眼を置いています。

子どもにとって大切なことは何かを考え、子どもたちが社会に出て、自分で考え、行動できるよう、地域社会で育てようとする活動ミッションもぶれることはありません。

評価されることで自信を無くしてしまった子どもに寄り添い、一人一人を認めながらも社会で大切な事をしっかり教えています。

「こどもごはん」も、そのミッションのもと、子どもでもできる食事作り、生活のスキルとして実施しています。2つの活動とも、無料で使用できる場があり、運営費もかからない工夫をしていました。

「課題は？」とお聞きしても「大切だと思うことを、無理せず、楽しく、やりたいことをやっているだけだから」と語るお二人の表情は明るく快活です。そう言いながらも、他の居場所の立ち上げを手伝ったり、個人のネットワークを使って居場所の担い手を発掘するなど、地域に居場所が広がることの大切さを感じ、支援していました。

